

## 8 近代化論批判と民衆の発見

—竹内好と梶村秀樹を中心に—

ホン ジョン ウク  
洪 宗 郁

### 1. 日本モデル論としての近代化論

1950年代を迎えた日本では、「アジア」や「民族」への関心が高まった。1949年に中華人民共和国が成立し、ベトナムと朝鮮半島の北側に反植民地主義を掲げた政権が発足したことに加え、日本自身が連合軍の占領下に置かれている状況が、その背景にあった。1955年4月にインドネシアのバンドンに集結したアジア・アフリカ諸国の代表は、米国とソ連の帝国主義を批判した。冷戦秩序に亀裂を生みつつ登場した非植民地化（decolonization）の機運は、日本社会にアジア侵略への反省を促した。

一方で、サンフランシスコ講和条約で連合軍の占領が終わり、朝鮮戦争の特需で景気が右肩上がりになった。1955～56年頃から高度経済成長が始まるなかで、日本の近代を経済発展という見地から肯定的にとらえようとする傾向が台頭した。この傾向に反比例するように、折からのスターリン批判の影響もあり、マルクス主義の知的権威が急速に衰退し、「戦後は終わった」という認識が広まった<sup>1</sup>。冷戦と非植民地化という世界的な潮流のなか、1950年代半ばの日本は、アジア侵略への反省と日本企業のアジア「復帰」への期待がぶつかり合う状況であった。

---

<sup>1</sup> 安丸良夫「日本の近代化についての帝国主義的歴史観」（初出：1962年）同『〈方法〉としての思想史』校倉書房、1996年、210頁。

1950年代半ばは、米国のアジア研究においても重要な時期であった。冷戦が軍事的な対立から、さらに経済成長を中心とした体制競争へと拡大し、アジアは冷戦の最前線であるだけでなく、その知的装置である地域研究が角逐する場となった<sup>2</sup>。こうしたなかで、ハーバード大学の日本史家エドウィン・ライシャワー (Edwin O. Reischauer) などを中心となり、旧敵国の日本をアジア近代化のモデルとして再発見しようとする動きが現れた。1960年8月には米国と日本の学者が参加して「箱根会議」が開かれた。会議の共通テーマは「近代化の概念と日本」であった。箱根会議は米国発祥の近代化論が日本社会に姿を現すきっかけとなった<sup>3</sup>。

近代化論が日本の論壇に本格的に登場したのは1961年である。箱根会議の報告に基づくジョン・ホール (John W. Hall) の論文「日本の近代化——概念構成の諸問題——」が『思想』1961年1月号に掲載され、6月にはウォルト・ロストウ (Walt W. Rostow) の著書『経済成長の諸段階——一つの非共産主義宣言——』の翻訳が刊行された。雑誌『中央公論』は5月号より連続で近代化論の論文を掲載したが、9月号には、同年4月に駐日米国大使として赴任したライシャワーと経済学者の中山伊知郎との対談「日本近代化の歴史的評価」が掲載された。近代化論は、1960年の安保闘争に危機感を懐いたアメリカ当局によって、「文化冷戦」を戦う武器として政策的に導入された側面があった。以後、「ライシャワー攻勢」と呼ばれる近代化論の積極的な宣伝が行われ、1963年になると近代化論は日本論壇の「流行」となった。『思想』1963年11月号は「近代化」をめぐって」という特集を設けた<sup>4</sup>。

---

2 장세진 「라이샤워 (Edwin O. Reischauer), 동아시아, '권력/지식' 의 테크놀로지 -전후 미국의 지역연구와 한국학의 배치-」 『상허학보』 36輯、2012年10月、87~94頁。

3 임성모 「냉전과 대중사회 담론의 외연 : 미국 근대화론의 한·일 이식」 『한림일본학』 26輯、2015年5月、247~251頁。

4 和田春樹 「現代的「近代化」論の思想と論理」 『歴史学研究』 318号、1966年11月、2頁。

和田春樹は、当時流行した近代化論を「過去から現在をへて未来におよぶ世界史の基本的過程、その必然的な、のぞましい発展過程を「近代化 modernization」、すなわち近代西欧社会の諸特徴のすべて、あるいはそのいずれかをおびるような社会変化の進行と把握する歴史観」と定義した。近代化論は、米国とソ連が中心となった冷戦で西欧社会の優位を証明しようとする試みでもあった。つまり「近代西欧社会にはそれ以上の深刻な社会変化を想定せず、近代西欧そのものあるいはその水準を「近代化」されていない国々ないしは地域の目標とする歴史観」であり、「社会主義的変革の必然性を主張するマルクス主義とは対立する歴史観」であった<sup>5</sup>。

箱根会議に戻り、米国の近代化論が初めて日本に登場する瞬間を見てみよう。箱根会議は、「アジア研究協会」(Association for Asian Studies)傘下の「近代日本研究会議」(Conference on Modern Japan)が主導した<sup>6</sup>。「近代日本研究会議」は、米国の近代化論元年といえる1958年に、ジョン・ホールらが中心となって組織した。1961年に公開された『箱根会議議事録』によれば、会議の参加者は、米国側からジョン・ホール、エドウィン・ライシャワーなど14人、日本側から丸山真男、川島武宜、大内力、遠山茂樹など14人で、日米合わせて28人であった。事前に参加者から提出された19編の論文をもとに3日間にわたって討論が行われた<sup>7</sup>。

議事録にまとめられた内容を見ると、近代あるいは近代化とは何かというやや抽象的な議論が主要な部分を占めている。近代化論が提起された背景にある冷戦や非植民地化に関する認識は、行間から読みとるしかない。冒頭で「近代化の範疇に社会主義社会を対象とするかどうか」が一つの問

---

<sup>5</sup> 和田春樹、同上論文、3頁。

<sup>6</sup> 임성모、前掲論文、2015年、247～251頁。

<sup>7</sup> 『箱根会議議事録；Association for Asian Studies；Conference on Modern Japan Proceedings of Preliminary Seminars at Hakone, Japan；Aug.30-Sept.1, 1960』1961。以下、本資料からの引用については、本文中に頁数のみを示す。

題だったと述べてはいるが(3頁)、実際の討論では、社会主義への言及や考慮はほぼ見られない。植民地問題についても軽視されていた。

「近代化の型」については「I. Indigenous」と「II. Underdeveloped」を区分し、それぞれを「A. Old and Traditional」と「B. Young and Empty」にさらに分け、合わせて4つのタイプを設定したが、植民地問題はIIのA、すなわち「Underdeveloped」で「Old and Traditional」タイプの下に「① Colony」と「② Non-colony」を置くにとどまった。ちなみに日本はII-A-②タイプの代表として位置づけられた(17~20頁)。

日米間の争点は、日本の近代をどう見るかにあった。ジョン・ホールは、「日本の学者が《おくらしている》という言葉をよく使っていますが、それは、先に出た国を見ているからでしょう」(20頁)とし、日本の近代化を高く評価した後、「容易に近代化された国は、それ以前に例えば封建といった比較的共通の社会状態が存在した」と、近代化ができる要因を内因論で説明する仮説を提示した(49頁)。これについては、たとえば、加藤周一も「日本人は feudalism について hindrance の面だけを強調して来たが、Jansen 氏が paper で指摘しているように more help than hindrance の面で日本人は考えたことがあるかどうかを考え直して見たい」(51頁)と関心を示した。

ただし、概して日本の学者たちは、民主主義などの価値規範や社会意識の観点から日本の近代には批判的であった。リチャード・ラビノヴィッツ(Richard W. Rabinowitz)が、ナチスを近代ではないとはいえないとし、民主主義と近代化との直接的な関連を否定したことに対して、堀江保蔵などは、「indigenous」な近代化を成しとげた国と「late comers」を区別する基準として民主主義の進展が重要だとし、日本は民主主義がないところに産業革命が起こったので、国の構造、とくに「democracy」の面ではまだ完全に近代化されていないと主張した(15~16頁)。またエドウィン・クロッカー(Edwin S. Crawcour)も、丸山や高坂正顕などが「徳川時代に起った近代化のことを考えず、self-realization とか人間中心主義といって、むしろ西欧の

old individualism」を重視する傾向があると指摘した(22頁)。こうしたやりとりからは、後に和田春樹が、古典的近代化論は「自由で民主的」な西欧社会を理想」としたのに対し、現代的近代化論では「近代化」は「工業化」を意味するだけだと批判した事実が思い浮かぶ<sup>8</sup>。

会議の席上、イギリスの日本研究者であるロナルド・ドーア (Ronald P. Dore) は「日本における資本主義の研究は、日本経済乃至その環境たる社会をもっとよくしよう、貧乏をなくして行くにはどうしたらよいかという考え方の上に立っているのに対して、Rosovsky 氏や Lockwood 氏の問題設定は、日本の経済はともかくもうまくやって来た、これから近代化する国が当面している諸問題への教訓を日本の経験が与えてくれるであろう、とくに政府の役割は重要であろう、という前提に立っているのだ」(64頁)とまとめた。米国の近代化論が日本モデル論という実践的な目的によって規定されていたことがあらためてうかがえる。

米国の近代化論のアジア諸国への含意は、日本の発展を後進国開発のモデルとしてうち出すところにあった<sup>9</sup>。ライシャワーは、「西欧の近代化の範型を用いて近代化の過程を早め、しかも大成功を収めた唯一の」国として日本を盛りたて、日本の近代化が「低開発国の手本になるべき」だと主張した<sup>10</sup>。このような議論に呼応する日本の学者たちは「日本文化フォーラム」などの保守的な団体に集まった。彼らは、日本の近代があまりにも否定的に評価されてきたと批判し、江戸時代にまでさかのぼって「日本人の「活力」や能力の高さ」を描こうとした。とくに過去の反省に重きをおくマルクス主義歴史学に対し、明確な対決姿勢を示した<sup>11</sup>。

---

<sup>8</sup> 和田春樹、前掲論文、1966年、3頁。

<sup>9</sup> 임성모、前掲論文、2015年、248頁。

<sup>10</sup> 金原左門『「日本近代化」論の歴史像——その批判的検討への視点——』中央大学出版部、1968年、237頁。

<sup>11</sup> 安丸良夫「日本の近代化についての帝国主義的歴史観」、前掲『〈方法〉としての思想史』、214～215頁。

日本の近代化に関する近代化論者の証明手続きは、内因論に拠っていた。箱根会議でのジョン・ホールの立場と同様に、ライシャワーも近代化の前提として封建制を想定した。ライシャワーは『東洋文化史』(*East Asia: The Great Tradition*, 1960 ; *East Asia: The Great Transformation*, 1965) で、日本が「アジア諸国の中で、なぜ、どのように唯一の近代化に成功したのか」という問いを投げかけ、その答えを封建制の存在に求めた<sup>12</sup>。ただし、この論理に拠っては、日本をアジア近代化のモデルにすることはできない。封建制を経ていない他のアジア地域は、近代化が難しいことになるからである。

ここで強調されたのが、日本の資本とアメリカの民主主義の役割であった。これではじめて、たとえば韓国社会に対する「停滞性論」的理解にもかかわらず、外部からの衝撃によって近代化が可能だという論理が成立した<sup>13</sup>。ただし、近代化論でいう民主主義とは、冷戦秩序のもとで米国の陣営に立つことを意味するだけで、実質的な政治的民主化とはそれほど関係がなかった。結局、ライシャワーが説く「近代化」は「工業化」にすぎなかった。これに対して、1960年代以降に韓国の知識人が政治的民主化を熱望し、また内在的発展論を追求したことは、米国の近代化論の影響を、いわば批判的に受容したものであった。

## 2. 戦後歴史学の「客観主義」

箱根会議に参加した米国の学者たちは、日本の近代史を経済成長という面でも高く評価した。このような観点に立てば、日本社会における民主主義のための努力やその挫折の歴史は意味を失う。会議に出席した川島武宜は

---

<sup>12</sup> 장세진, 前掲論文, 2012年, 106頁。

<sup>13</sup> 안종철 「주일대사 에드윈 라이샤워의 '근대화론' 과 한국사 인식」 『역사문제연구』 29号, 2013年4月, 300頁。

「日本人学者は政治的論議（政談）と社会科学上の分析とを同一視しているのだという誤解が、一部の外人学者にあたりして、「民主主義を問題とするのかしないのか、まずそれを返答せよ」、とことば鋭く日本人学者を難詰する場面があった」と伝えた。川島は「今日におけるアジア・アフリカ・中南米における諸社会の歴史的变化の動きは、「民主主義」の価値や、それによる動機づけを無視するなら、到底正確には分析され得ず、その将来についての予見をも誤るであろう」と主張した。会議でこのような立場に立ったのは、主に川島と遠山茂樹だったという<sup>14</sup>。

遠山は、マルクス主義歴史学、なかでも日本の「封建性」に注目する講座派を代表する歴史学者だった。川島は、丸山真男とともに、西欧社会に照らして日本の前近代性を指摘する、近代主義の潮流を代表する法学者であった。講座派と近代主義の間には、一種の協力関係があったことになる。安丸良夫は、マルクス主義と近代主義の理論は、「緊張・対立・誤解などをはらんだ複雑な関係にあったが、戦後民主主義を支える論理としてはむしろ相補的に機能した」と分析した<sup>15</sup>。米国の近代化論は、このような協力関係に支えられていた歴史像を正面から否定したことになる。

永井和によれば、講座派のマルクス主義歴史学は、日本の近代について、2つの問いを提起した。第一は、「なぜ日本（＝アジア）は西欧に比べて発展が遅れてしまったのか。なぜ日本（＝アジア）では、封建制から資本制への移行・発展が西欧のように進まなかったのか」という問いである。第二は、第一の問いからの当然の帰結として「同じアジアの国でありながら、なぜ日本のみが後進資本主義国家としてまがりなりにも独立を維持し、さらには帝国主義国家へと転成したのに対して、インドや中国は植民地・

---

<sup>14</sup> 川島武宣「近代日本史の社会科学的研究——一九六〇年箱根会議の感想——」『思想』442号、1961年4月、108～109頁（傍点は省略）。

<sup>15</sup> 安丸良夫「反動イデオロギーの現段階——歴史観を中心に——」（初出：1968年）、前掲『〈方法〉としての思想史』、247頁。

半植民地化されてしまったのか、その差はいったい何に由来するのか」という問いである<sup>16</sup>。

講座派の見解が敗戦後の日本社会で説得力を持ちえたのは、彼らが投げかけた問いそのものが持つ切実さのためであった。ところが高度成長で日本と西欧の間のギャップが縮小すると、第一の問いはかつて持っていた切実さを失った。これで第二の問い、つまり「なぜ日本のみが近代化に成功しえたのか」だけが残った。永井はこれによって講座派と近代化論との間の距離がほぼなくなったと見た<sup>17</sup>。講座派の歴史学のみならず、近代主義もこのような状況から自由ではなかった。戦後日本の近代主義を代表する思想史家の丸山真男は、箱根会議で「日本が今 modern society を持っているのに対して、Turkey や中国はそれを持っていないのです」（21頁）と発言している。高島通敏は「アメリカ由来の「近代化理論」に、戦後日本的な「近代主義」で対抗しようとしたことに、そもそも限界があったのではないか」と分析している<sup>18</sup>。

こうした状況で、講座派の歴史学者による近代化論批判は、日本の近代が内部の「人民」や外部の「民族」に与えた傷を告発するところに焦点が合わされた。井上清は、「近代の歴史的進歩性をとりあげると同時に、その歴史的限界、人民や他民族にたいする抑圧や侵略の問題、植民地主義の側面もあますところなくとらえるべき」だと主張した<sup>19</sup>。日本の朝鮮史研究者も、近代化論は新植民地主義であると猛烈に批判した。中塚明と山辺健太郎は、ライシャワーやロストウによる「侵略者があたかも被侵略者を

---

<sup>16</sup> 永井和「戦後マルクス主義史学とアジア認識——「アジア的停滞性論」のアポリア——」古屋哲夫編『新版 近代日本のアジア認識』緑蔭書房、1996年、664～665頁。

<sup>17</sup> 永井和、同上論文、666頁。

<sup>18</sup> 高島通敏「二つの「戦後」と「近代後」——「池袋会議」の主題——」『世界』486号、1986年3月、194頁。

<sup>19</sup> 金原左門、前掲『「日本近代化」論の歴史像』、240頁より重引。

近代化したかのようにいう議論」を、「現代の神話」と攻撃した<sup>20</sup>。宮田節子は「日本の近代が、他民族の、とりわけ朝鮮民族の血と汗のうえに築かれた事実によってこそ、「近代化論」は、もっとも正しく批判されるはず」と主張した<sup>21</sup>。これは韓国の朴喜範が「先進資本主義の罪過、すなわち先進経済が後進経済に及ぼした経済的圧力は、とくにそれらの植民地政策が後進国の近代化を阻害した諸効果について、彼の著書を通じて一言も言及がないばかりか、巧みに先進経済の利害関係を代弁する」とロストウを批判したことと一脈相通じる<sup>22</sup>。

近代化論批判の持つ弱点は、積極的に近代化を支えた民衆の存在をいかに受けとめるべきかという点にあった。これについて、歴史学者としては先駆的に近代化論批判を試みた安丸良夫の言及が注目に値する。安丸は「産業化という見地から日本の近代史をみれば日本の近代化は大成功であったが、マルクス主義歴史学にとってはそのような近代化こそが民主主義と個人主義をおしつぶし対外侵略をひきおこしたのだということが問題であった」とし、「近代化＝産業化＝生産力の発展という視角から近代史を把握しようとする立場の代表者」であるロストウの論理のなかでは、「自由や平等や正義は登場する場所を失」うと批判した<sup>23</sup>。また、ロストウが「近代日本に一貫する侵略の衝動」を「反応的〔reactive〕ナショナリズムのせい」にしたことに対して、「そのような反動的國家主義こそ日本資本主義と不可欠に結合したものでなかったか」と指摘した<sup>24</sup>。

---

<sup>20</sup> 中塚明・山辺健太郎「開国と植民地化の過程」朝鮮史研究会編『朝鮮史入門』太平出版社、1966年、293頁。

<sup>21</sup> 宮田節子「日本帝國主義の朝鮮支配」、前掲『朝鮮史入門』、299頁。

<sup>22</sup> 朴喜範「『ロストウ』史觀의 批判 -近代化問題를 中心으로-」『經濟論集』5卷1号、1966年3月、4頁。

<sup>23</sup> 安丸良夫「日本の近代化についての帝國主義的歴史觀」、前掲『〈方法〉としての思想史』、216～217頁。

<sup>24</sup> 安丸良夫、同上論文、222頁。

ここまでは、他のマルクス主義歴史学者の批判と大きく変わらない。安丸の特徴は、近代化論が「急速な経済発展にともなう日常的な幸福のささやかな実現の可能性に生き甲斐を託すようになった民衆の実感をなほほどかその背景としていた」点を見逃していないところにある<sup>25</sup>。安丸は「マルクス主義者もふくめていわゆる進歩的歴史学者たちの多くは、彼ら〔近代化論者〕の主張を一つのナンセンスとのみ考え、彼らの主張もまた歴史事実のある側面をふまえており、民衆の日常感覚に訴えうるということを見無視している」と指摘し、近代化論の攻勢を既存の歴史学の危機として真剣に受けとめた<sup>26</sup>。

民衆の欲求と責任を認めることによって、アジア侵略で綴られた日本の近代を批判する視点は、昭和史論争ですでに提起されていた。1950年代に入ってマルクス主義歴史学では主流の経済構造決定論を批判して、政治史の刷新を提唱する動きがあった。このような流れのなかで1955年に遠山茂樹、今井清一、藤原彰の共著として『昭和史』（岩波新書）が刊行された<sup>27</sup>。マルクス主義歴史学者の執筆にもかかわらず、昭和天皇個人の戦争責任を想起させる「昭和」という元号をあえてタイトルに入れ、「民衆の時間観念」と連動させた。また、被支配階級の呼称として「国民」という言葉が選ばれたことは、戦後日本が総力戦という大規模な国民化の経験は無自覚に引き継いでいたことの現れと言える<sup>28</sup>。ただし、叙述の基本はあくまでも天皇制と共産党との対決に置かれた。

昭和史論争は、『昭和史』には「人間がない」という文芸評論家の亀井勝一郎の批判によって引き起こされた。亀井は「日華事変から太平洋戦

---

<sup>25</sup> 安丸良夫、同上論文、211頁。

<sup>26</sup> 安丸良夫、同上論文、243頁。

<sup>27</sup> 大門正克「昭和史論争とは何だったのか」大門正克編著『昭和史論争を問う——歴史を叙述することの可能性——』日本経済評論社、2006年、10～11頁。

<sup>28</sup> 戸遣秀明「昭和史が生まれる」、前掲『昭和史論争を問う』、59頁、63頁。

争にいたるまで、無暴〔謀〕の戦いであったにせよ、それを支持した「国民」がいた筈である」が、『昭和史』には「戦争を強行した軍部や政治家や実業家と、それに反対して弾圧された共産主義者や自由主義者と、この双方だけがあって、その中間にあって動揺した国民層のすがたは見あたらないのだ」と、「国民」の「不在」を指摘した<sup>29</sup>。昭和史論争は、マルクス主義歴史学による階級対立中心の政治構造論を批判し、人間描写の重要性を提起したものと理解される場合が多い。だが、最近の研究では、民衆の主体的な戦争責任を問いなおした側面が改めて注目されている<sup>30</sup>。『昭和史』の叙述が、戦争を支持した民衆の主体性を否定することによって、民衆の戦争責任まで免責してしまうことの問題性を指摘し、どのような欲求であっても、そこに民衆の主体性を捉えることが民衆の戦争責任の問い直しにつながるという分析である。

亀井は、日本国民の「東洋人蔑視の感情」に目をつぶって、中国侵略の責任を「支配階級」にのみ押しつけることを、「日本「近代化」の悲劇への不感症」と批判した<sup>31</sup>。昭和史論争に参加した論者のなかで、民衆の戦争責任に着目した論者としては、亀井のほか「戦時期の人びとが戦争を支持した側面から目をそらさなかった」松沢弘陽と荒井信一が欠かせない<sup>32</sup>。松沢は『昭和史』新版（1959年）に対する書評で「国民と戦争責任」を取り上げて、国民が「政治的に悪な行為をする場合には、責任能力すらあいまいな存在」に描かれる問題を指摘した<sup>33</sup>。荒井は、亀井の「国民不在論」を「意識や心理の問題——歴史の主体的契機の問題」を提起したものと評

<sup>29</sup> 亀井勝一郎「現代歴史家への疑問——歴史家に「総合的」能力を要求することは果して無理だろうか——」（初出：1956年）、前掲『昭和史論争を問う』、221頁。

<sup>30</sup> 大門正克「昭和史論争とは何だったのか」および戸邊秀明「昭和史が生まれる」参照。

<sup>31</sup> 亀井勝一郎「現代歴史家への疑問」、前掲『昭和史論争を問う』、221頁。

<sup>32</sup> 大門正克「昭和史論争とは何だったのか」、前掲『昭和史論争を問う』、34頁。

<sup>33</sup> 松沢弘陽「書評『昭和史（新版）』」（初出：1959年）、前掲『昭和史論争を問う』、269頁。

価した<sup>34</sup>。また亀井の批判を「マルクス主義をふくめた現代歴史学の「理論は信じるが、感覚は信じない」客観主義をつき、その主体的契機についての反省をうながす」ものと評価した<sup>35</sup>。荒井は歴史学の「客観主義」を何度も批判し、「従来の戦争責任論とは、もっと別の次元で、戦争責任を考えていかなければならない」と述べた<sup>36</sup>。

戦後歴史学の立場から近代化論を批判しながらも、「民衆の日常感覚」に注目した安丸の態度は、まさに昭和史論争で亀井、松沢、荒井が提示した方向性に共鳴したものといえる。近代化論を乗り越える認識の地平がすぐに提示されたわけではないが、1960～70年代における安丸の民衆思想史研究は、昭和史論争や米国の近代化論との格闘から得られた成果ともいえる。安丸の『日本の近代化と民衆思想』（青木書店、1974年）は、近代主義と近代化論の両方に対する徹底した批判であった<sup>37</sup>。任城模<sup>イムソンモ</sup>は、昭和史論争がマルクス主義歴史学に対する保守派・リベラル陣営の攻勢とすれば、箱根会議を契機に導入された米国の近代化論は、反マルクス主義的な枠組みに立脚して従来の攻勢をさらに強化する武器だったと分析した<sup>38</sup>。このような状況で、批判的歴史学の内部から、戦後歴史学の客観主義を反省し、アジアや民衆に注目する傾向が現れたのである。

### 3. 竹内好のアジア主義

「大東亜戦争」の理念を論じたことで悪名高い座談会「近代の超克」（1942年）にも参加していた亀井は、昭和史論争ではアジア侵略に対する民衆の

---

<sup>34</sup> 荒井信一「危機意識と現代史——「昭和史」論争をめぐって——」（初出：1960年）、前掲『昭和史論争を問う』、287頁。

<sup>35</sup> 荒井信一、同上論文、282頁。

<sup>36</sup> 荒井信一、同上論文、291頁。

<sup>37</sup> 大門正克「昭和史論争とは何だったのか」、前掲『昭和史論争を問う』、25頁。

<sup>38</sup> 임성모、前掲論文、2015年、252頁。

責任を問うた。変化の核心は「中国関係の認識」にあった。亀井は「日本近代化」の性格を問いつつ、「現代史をつらぬく根幹は、日本の対中国関係ではなかろうか」とし、「戦後私の眼をひらいてくれたのは竹内好の『現代中国論』であった」と告白している<sup>39</sup>。興味深いのは、竹内も「戦争一般」と「対中国（および対アジア）侵略戦争」を区別する亀井の論理を取りあげ、「私はこの点だけについていえば、亀井の考え方を支持したい」と述べた点である<sup>40</sup>。竹内は民衆の心情を分析し、ナショナリズムやアジア主義の再評価を試みた。竹内は、アジア侵略を支持した日本民衆の経験を取り上げて、米国の近代化論が日本のナショナリズムと結合して民衆に広く支持されている1960年代初頭の状況に重ねた。と同時に、日本の近代史を振り返って、ナショナリズムやアジア主義から、帝国主義に回収されない民衆のエネルギーをくみ上げようとした。このような思想的実験の凝縮されている文章が「日本のアジア主義」（1963年、原題「アジア主義の展望」）である<sup>41</sup>。

竹内は「民権派の「アジア連帯」観と玄洋社の「大アジア主義」とを区別し、対立させているのは私から見てやや機械的に過ぎるように思われる。〔中略〕そもそも「侵略」と「連帯」を具体的状況において区別できるかどうかが大問題である」と主張した<sup>42</sup>。アジア主義については、「どんなに割りきしても、アジア諸国の連帯（侵略を手段とすると否とを問わず）の指向を内包している点だけには共通性を認めないわけにはいかない。これが最小限に規定したアジア主義の属性である」と明らかにした<sup>43</sup>。

<sup>39</sup> 荒井信一「危機意識と現代史」、前掲『昭和史論争を問う』、286頁より重引。

<sup>40</sup> 竹内好「近代の超克」（初出：1959年）丸川哲史・鈴木将久編『竹内好セレクションⅠ 日本への／からのまなざし』日本経済評論社、2006年、115頁；大門正克「昭和史論争とは何だったのか」、前掲『昭和史論争を問う』、21頁を参照。

<sup>41</sup> 竹内好「日本のアジア主義」（初出：1963年）丸川哲史・鈴木将久編『竹内好セレクションⅡ アジアへの／からのまなざし』日本経済評論社、2006年。

<sup>42</sup> 竹内好、同上論文、258～259頁。

<sup>43</sup> 竹内好、同上論文、261～262頁。

竹内は、侵略と連帯が絡まりあう思想的資源として、天佑俠の実践と樽井藤吉の「大東合邦論」に注目した。天佑俠が東学農民軍と接触した事実について、これを連帯の象徴として着目し、樽井がうち出した「日韓の紛争を解決するために、また韓国の近代化を推進するために、また列強の侵略を共同防衛するために、日韓両国が平等合併せよという主張」を評価した<sup>44</sup>。そして天佑俠に参加し、「大東合邦論」に立脚して「日韓合邦」を推進した内田良平の再評価を主張した。

竹内は、日本の社会主義がナショナリズムとアジア主義を敬遠し、右翼がそれを独占したことから、日本近代史の悲劇が始まったとみた。「日本の社会主義が黎明期においてすでにコスモポリタンの、直輸入型の傾向があったのではないか」という石母田正の疑問を紹介し、「これは単に明治末期の社会主義思想だけの問題ではない。コミンテルン時代の問題でもあるし、コミュニストにとってなぜ民族問題がつかずきの石となったかの問題にもつながる。ナショナリズムのウルトラ化の問題でもあるし、また、アジア主義がなぜ黒竜会イデオロギイによって独占されるようになったかの問題にもつながる」と主張した<sup>45</sup>。

さらに「玄洋社＝黒竜会を、侵略主義の権化として、手きびしく批判した」E・H・ノーマン（Edgerton H. Norman）に対して、「玄洋社（および黒竜会）が当初から一貫して侵略主義であったという規定は、絶対平和論によらないかぎり、歴史学としては、無理がある」と批判した。竹内は「おくれて出発した日本の資本主義が、内部欠陥を対外進出によってカヴァする型をくり返すことによって、一九四五年まで来たことは事実である。これは根本は人民の弱さに基づくが、この型を成立させない契機を歴史上に発見できるか、というところに今日におけるアジア主義の最大の問題がかかって

---

<sup>44</sup> 竹内好、同上論文、279頁、290頁。

<sup>45</sup> 竹内好、同上論文、310頁。

いるだろう」と主張した<sup>46</sup>。

判沢弘の「東亜共栄圏の思想——内田良平を中心に——」（1963年）も同様の問題意識を込めていた。これに対しては、梶村秀樹をはじめとする朝鮮史研究者たちが連名で批判論文を発表している<sup>47</sup>。梶村らは、まず判沢の論文を「竹内好氏の「アジア主義の展望」に示唆を受け、それを発展させようとしたもの」と規定し、さらに「竹内氏が含みを残して曖昧な表現にとどめておいた部分を、判沢氏はいかにも明快に断定してしまった」と指摘した。そして「判沢氏、竹内氏が、圧迫民族としての感覚が民衆レベルにおいて必ずしも抜け切っていない日本の現状で、このような論文を公表することがどの様に作用するかについて責任の意識を持っているかどうかを、我々はあわせて問いたい」と批判した<sup>48</sup>。

竹内や判沢への批判は、まず「朝鮮近代史に関連する事項の記述が「我々が知り得た事実と余りにもかけ離れた」ものであることに向けられた<sup>49</sup>。史料の面でも、一進会の指導者・李容九<sup>イヨング</sup>の活動を肯定的に評価した大東国男『李容九の生涯——善隣友好の初念を貫く——』（時事通信社、1960年）を無原則・無批判的に受け入れ、まったく間違ったイメージを描いていると指摘した。そして「日本のアジア主義思想が、少なくとも朝鮮に視点を置いて考える限り」「極めて主観的でひとりよがりのものであり、その行動が朝鮮の正常な歴史発展に対し否定的機能を果たした」と批判した<sup>50</sup>。さらに「現在は、日本帝国主義者が日韓会談その他によって、アジアへの再進出を試みつつあり、その為のイデオロギーを国民に注入するために躍

<sup>46</sup> 竹内好、同上論文、320～322頁。

<sup>47</sup> 楠原利治・北村秀人・梶村秀樹・宮田節子・姜徳相「「アジア主義」と朝鮮——判沢弘「東亜共栄圏の思想」について——」『歴史学研究』289号、1964年6月。

<sup>48</sup> 楠原利治ほか、同上論文、23頁。

<sup>49</sup> 楠原利治ほか、同上論文、23頁。

<sup>50</sup> 楠原利治ほか、同上論文、28頁。

起になっている時期」であることに注意を喚起し、「大東亜戦争は余りにひどいが、そこまでいかない範囲での進出なら再び行なうことが許されるのだろうか」と、竹内らの論理が現実には及ばず負の影響を警戒した<sup>51</sup>。

梶村は、同時期に単独で書いた「竹内好氏の「アジア主義の展望」の一解釈」（1964年）でも、「主体性をもつ思想家たらんとする竹内氏の意図に敬意」を表しながらも、「なぜ、今日、少なくとも「見方によっては徹頭徹尾侵略的な」玄洋社＝黒龍会をあのよう評価しなければならないのか」と非難している<sup>52</sup>。また、おそらく朝鮮を念頭において発せられたはずの「独立は他から与えられるものではないことを、明治の日本人は骨身にしみて感じていた」という竹内の言葉を引用し、「主体性の強調の意味はきわめて重要だと思う。しかし、それが今日状況の中でどうしてナショナルなものを中核にして成立する以外にないのだろうか」と問い質した<sup>53</sup>。

梶村は「『日本人の朝鮮観』の成立根拠について—「アジア主義」再評価論批判—」（1964年）でも、アジア主義の再評価が「民族を实体としてきわめて重視する反面、階級的視点を欠落させている」と指摘した<sup>54</sup>。すなわち「現実の日本国家の枠の中に存在する多様かつ深刻な階級的支配収奪関係を、事実上すべて抽象的な民族的被抑圧に解消してしまうような発想法では、竹内氏の問題提起、支配階級のイデオロギーに対して真に有効に対決しえないだろう」と指摘し、「『近代化論』『日本モデル論』はライシャワーが提唱したことによってのみ、存在し、また悪しきイデオロギーなのだろうか」と論難した<sup>55</sup>。竹内の論理そのものが近代化論にほかならないとい

---

<sup>51</sup> 楠原利治ほか、同上論文、22頁。

<sup>52</sup> 梶村秀樹「竹内好氏の「アジア主義の展望」の一解釈」（初出：1964年4月）梶村秀樹著作集刊行委員会編『梶村秀樹著作集 第1巻 朝鮮史と日本人』明石書店、1992年、97頁。

<sup>53</sup> 梶村秀樹、同上論文、99頁、101頁。

<sup>54</sup> 梶村秀樹「『日本人の朝鮮観』の成立根拠について—「アジア主義」再評価論批判—」（初出：1964年7月）、前掲『梶村秀樹著作集 第1巻』、107頁。

<sup>55</sup> 梶村秀樹、同上論文、108頁。

う批判であった。

さらに梶村は「現在の「日本ナショナリズム」論について」（1965年）で、近代化論とナショナリズムが同じ根源を持つと見て、「対外進出のイデオロギーとしてのナショナリズムにも、当然いっそう近代化された迷彩が施されている。それは、「アジア諸国の生産力の発展に協力する」といういわゆる東亜経綸主義的要素のいっそうの強調にあらわれている」と分析した<sup>56</sup>。また「ナショナリズムを無視することは、大衆離れすることであるという迷信を暗黙の前提として、多くの議論が展開されている」と批判し、「戦前講座派の理論体系の延長線上に、今に至るまで、「真の近代化未実現論」とともに、「真のナショナリズム未成立論」が、くり返し表明されている」と指摘する<sup>57</sup>。さらに竹内とライシャワーこそ、ある意味で「戦前講座派あるいは戦後歴研〔歴史学研究会〕の忠実な学習者」と皮肉った。そして「支配のイデオロギー」からの「大衆の自立」のために「科学精神を透徹させる」必要性を訴えた<sup>58</sup>。

梶村の竹内批判を分析した中野敏男は、中国文学者の竹内好と朝鮮史家の梶村秀樹との対立は「戦後日本で加害の戦争責任を問う志向の内側に生じた重大な分岐の存在を示している」ととらえた<sup>59</sup>。竹内については、「アジアを志向する思想的エネルギーを認め、そこから民族感情に根ざす「伝統」が創出されると考えた」が、「国民的主体」の固定観念が頑固に生き続けている」と見た。他方で梶村については、戦争責任を果たすためには民族感情に基づいたナショナルな責任主体を立てなければならない、とい

---

<sup>56</sup> 梶村秀樹「現在の「日本ナショナリズム」論について」（初出：1965年5月）、前掲『梶村秀樹著作集 第1巻』、118頁。

<sup>57</sup> 梶村秀樹、同上論文、119～120頁。

<sup>58</sup> 梶村秀樹、同上論文、120頁。

<sup>59</sup> 中野敏男「方法としてのアジアという陥穽——アジア主義をめぐる竹内好と梶村秀樹の交錯——」『季刊 前夜』第1期8号、2006年7月、209頁。

う「固定観念」を批判したと評価した。中野はこの論争が1990年代に展開された「歴史主体論争」を先取りしていたと分析した<sup>60</sup>。そして「朝鮮というトポスが、日本の植民地主義をとりわけその深部で問い糺さずにはおかない質と構造を備えている」と結論づけた<sup>61</sup>。中野の梶村評価については、後に再論する。

竹内は梶村の批判に対して応答しなかった。ただし『展望』に掲載された遠山の問題提起に対しては激しく反応し、いわゆる「『展望』誌上論争」が起きた<sup>62</sup>。

遠山は「明治維新研究の社会的責任」（1965年）で、まず、自分と異なる立論はすべてライシャワー路線だと責めたてるマルクス主義陣営の批判方式にも非を認めた<sup>63</sup>。しかし、竹内がアジア主義を「アジア諸国の連帯（侵略を手段とすると否とを問わず）の指向」と定義したことには異議を唱えた。遠山は、「「侵略主義と連帯意識の微妙な分離と結合の状態」が外見としてあらわれるのは、意図を語る思想において」であり、現実の実践においては「侵略と連帯の結合といった奇妙なことはありはしない」と批判した<sup>64</sup>。

また「近代国家の形成と膨張主義とは不可分」で「〔民族の〕独立はあくまで自力でち取り取る以外に達成できない、という確信はアジアのナショナリズムを普遍的に貫いている」という竹内の言及について、近代国家の形成と膨張主義とが分離・対立する可能性を失って不可分になったのは1890年代以降のことであり、自由民権派のナショナリズムは「朝鮮民衆への「同情」から、朝鮮民衆への指導へ、ついで武力による「開明」の強制へとい

---

<sup>60</sup> 中野敏男、同上論文、215頁。

<sup>61</sup> 中野敏男「植民地主義批判と朝鮮というトポス——アジア主義をめぐる竹内好と梶村秀樹の交錯 その2——」『季刊 前夜』第I期9号、2006年10月、223頁（一部傍点を省略）。

<sup>62</sup> 金原左門、前掲『「日本近代化」論の歴史像』、247頁。

<sup>63</sup> 遠山茂樹「明治維新研究の社会的責任」『展望』84号、1965年12月、16頁。

<sup>64</sup> 遠山茂樹、同上論文、28頁。

う軌跡をえがいて、侵略戦争を肯定する思想に転換した」と反論した<sup>65</sup>。

竹内は「学者の責任について—遠山茂樹氏に答える—」（1966年）で応答した。竹内は、日本の近代化が成功し、中国の近代化が失敗したことの理由を問うライシャワーの方式は、「講座派理論から植民地問題だけを抜き去ったものにほぼ等しい」と指摘し、遠山の企てを「植民地問題を再投入することによってライシャワー学説に対抗しようとするものだ」と分析した。第2章で検討した、講座派の近代化論批判が持つ問題点を見抜いていたといえる。これに対して竹内は、自分の方法は全く異なり、「中国の近代化は成功したが日本の近代化は失敗した、それはなぜか、という問題設定になる」と持論を対置した<sup>66</sup>。

さらに遠山の言うマルクス主義歴史学の党派性を一種の「神学」だと指摘し、「私は私なりに神を信ずる。遠山氏の神がカトリック的なのにくらべると、私の方は、より危機神学的な神ではあるが。これが私の党派性だ」と述べた。そして両者の違いは「人間観および歴史観（または歴史像）のちがいが」から来るとみた。つまり「遠山氏において、人間は動機と手段の区別が明瞭な、他者によってまると把握できる透明な実体であるし、私にとっては流動的な、状況的にしか自他につかめぬものである。歴史もまた、遠山氏には重苦しい所与であるし、私には可塑的な、分解可能な構築物としてある、というちがいがあ」と述べた<sup>67</sup>。

歴史発展の法則を前提にしてしまえば、民衆はどうしても受動的存在として描かれる。竹内はこれを「カトリック」的と表現した。西欧的近代を志向する日本の近代主義や戦後歴史学では、成長至上主義の近代化論を批判することはできないという指摘であった。竹内は、ナショナリズムやア

---

<sup>65</sup> 遠山茂樹、同上論文、30～31頁。

<sup>66</sup> 以上、竹内好「学者の責任について—遠山茂樹氏に答える—」『展望』90号、1966年6月、31頁。

<sup>67</sup> 竹内好、同上論文、33頁。

ジア主義に込められた民衆のエネルギーをくみ取ることによって可能と思われた、もうひとつの近代を夢見たのである。

#### 4. 梶村秀樹の民衆の発見

遠山茂樹は、米国の近代化論が日本の伝統社会を高く評価してナショナリズムと癒着する状況に批判的であった。より根本的には、日本の近代化について内在的發展を強調する議論が、アジアを停滞した社会と見なすアジア停滞性論につながってしまう戦後歴史学のアポリアに悩まされた。遠山は近代化論と戦後歴史学に共通している内因論が持つ問題点をのり越えるために「世界史の基本法則」の修正にのり出した。遠山が主導した歴史学研究会は、1961年の秋に共同研究「世界史の基本法則の再検討・世界史像の再構成」を行い、1963年には研究の長期計画の一環として「東アジア歴史像の検討」を総合部会のテーマにした。

遠山の企図は、「後進的社会の旧体制は資本主義の未発達によるものではなくて、資本主義（正確には世界資本主義）そのものの産物」と考える江口朴郎による「世界史の基本法則」の修正理論、そして多数の歴史的世界を想定する上原専禄の問題意識を、それぞれ引き継いで構想されている<sup>68</sup>。江口を継承した日本史研究者が遠山であれば、中国史では田中正俊、朝鮮史ではほかならぬ梶村秀樹が、戦後歴史学のアポリアに挑戦した<sup>69</sup>。

梶村は、1970年の講演「排外主義克服のための朝鮮史」で「社会経済史主義という、一種の偏向」を自己批判する<sup>70</sup>。内在的發展論がはらむ経済

---

<sup>68</sup> 永井和「戦後マルクス主義史学とアジア認識」、前掲『新版 近代日本のアジア認識』、681頁。

<sup>69</sup> 永井和、同上論文、684頁。

<sup>70</sup> 梶村秀樹「排外主義克服のための朝鮮史」（初出：1971年）、前掲『梶村秀樹著作集 第1巻』、54頁。

決定論を払拭していく過程であった。経済決定論から脱して梶村が目にしたのは、抵抗する民衆の姿である。梶村は「単に社会経済史的なものではない、朝鮮民衆の解放闘争の思想と、その内的な発展の経過」をとらえようとした<sup>71</sup>。ここで「民衆」は「英雄史観」の主人公ではなく、「多くの傷つき挫折していった部分を含みながら、そういう矛盾と痛苦を押しつけられた歪みを、満身創痍で引きうけ」る存在であった<sup>72</sup>。

ただし、梶村が目にしたのは、民族という主体ではなく、個人であった。梶村は「人間を奪回してゆこうという個々人の闘い」を重視し、日本帝国主義批判の根拠となる民衆意識を考える場合も、「一般論・抽象的ではなく、「個人」をとらえてやっていく必要がある」と述べた<sup>73</sup>。その際、日本近代史家の色川大吉による民衆史研究について「明治期の底辺の庶民意識の次元で掘り起こす作業をされていて、大変魅力的」と評価しながらも、「アジア観の次元では非常にロマンチックに日本人の主観を肯定するところから出発している点」に不満を示した。ナショナルに一体化された主体を拒否していることがわかる。そして梶村は、平板な「日本人」一般としてではなく、個人として祖父や父の具体的かつ日常的な歴史を深く探究する「主体的作業」の必要性を強調した<sup>74</sup>。

竹内好のアジア主義再評価についても、まだ否定的であった。自分の批判に対する竹内の沈黙を「少なくとも所説を今は撤回されているんじゃないか」と解釈し、「かつての野蛮な侵略を批判しながら「紳士的」な新植民地主義的進出を支える心理的基盤に他ならないのではないだろうか」と、再度疑いの目を向けた<sup>75</sup>。「主観的には、むしろ大真面目で、無意識

---

<sup>71</sup> 梶村秀樹、同上論文、56頁。

<sup>72</sup> 梶村秀樹、同上論文、65頁。

<sup>73</sup> 梶村秀樹、同上論文、65頁、70頁。

<sup>74</sup> 以上、梶村秀樹、同上論文、70頁。

<sup>75</sup> 梶村秀樹、同上論文、28～29頁。

のうちに独善を出してしまうという例」として辛辣に批判した<sup>76</sup>。

しかし、1970年代半ばの梶村の研究では、明らかな変化が見られる<sup>77</sup>。日韓「経済協力」が本格化するなか、1970年代に入って梶村は、韓国資本主義を説明する概念として「従属発展」という言葉を使う。梶村は「存立」のためなら「依存」をも辞さず、労働者の「犠牲」によってでも国民の「幸福」を成しとげようとする志向性を、朴正熙政権の属性とみた<sup>78</sup>。韓国民は外勢の侵略に蹂躪される受動的主体ではなく、自分の独立や発展のために奮闘する積極的主体として解釈された。竹内が描いた明治日本のイメージと一脈相通じる。

ベトナム派兵の分析でも新たな認識の地平がうかがえる。1965年8月に韓国の国会では、日韓基本条約の批准とベトナム派兵の決定がほぼ同時に行われた。韓国軍のベトナム派兵と日韓「経済協力」は、朴正熙政権の「従属発展」路線を後押しした二本柱であった。梶村は、ベトナム派兵は朴正熙政権の「主体的選択」であり、そのなかには「祖国の近代化」や「国威の宣揚」という「権力者の思想性」が克明に現われているとみた。それはまた「近代日本を支えてきた思想の醜悪さを再版して見せつけてくれる」ものだった<sup>79</sup>。昭和史論争で亀井勝一郎が言及した「日本近代化の悲劇」が思い浮かぶ<sup>80</sup>。梶村は、韓国の近代化は真の近代化ではないという言葉

---

<sup>76</sup> 梶村秀樹、同上論文、30頁。

<sup>77</sup> 以下に叙述する梶村の朴正熙政権認識は、洪宗郁「梶村秀樹の韓国資本主義論——内在的發展論としての「従属発展論」——」『社会科学』42巻4号、2013年2月（강원봉ほか『가지무라 히데키의 내재적 발전론을 다시 읽는다』아연출판부、2014年、所収）、5～6頁より抜粋した内容に新しい解釈を付け加えたものである。

<sup>78</sup> 梶村秀樹（筆名：藤森一清）「日韓条約体制10年の帰結——日韓体制の軌跡と変革の視座——」『破防法研究』24号、1975年12月、19頁。

<sup>79</sup> 梶村秀樹（筆名：吉永長生）「ベトナム派兵の傷痕」（初出：1974年）梶村秀樹著作集刊行委員会編『梶村秀樹著作集 第5巻 現代朝鮮への視座』明石書店、1993年、279頁、287頁、291頁。

<sup>80</sup> 荒井信一「危機意識と現代史」、前掲『昭和史論争を問う』、283頁。

では、もはや朴正熙政権を批判することはできないとし、経済成長という現実を直視して韓国の現状を「近代化された矛盾」として受け入れることを力説した。そしてそれを批判するためには、近代日本が達成した「自由と民主主義」の欺瞞性を含めて「近代化主義」そのものを乗り越えなければならないと主張した<sup>81</sup>。西欧的近代を到達すべき目標として想定し、日本やアジアの状況を近代の欠如や歪みと見る、近代主義と戦後歴史学への批判であった。

さらに、このような「朴「近代化」路線」を民衆の心情との関連で説明していることは注目に値する。梶村は、ベトナム派兵について、たとえば「韓国の国際的な地位が高まる」などの訴え方が「民衆の心情」に触れており、「民族的価値の回復」という幻想が、ベトナム戦争という虚偽の出口にむかっていくようなしくみをつくりだしていることは重大な問題」と指摘した<sup>82</sup>。「幻想」「虚偽」という言葉には、知識人の啓蒙主義が見うけられる。ただし、かつては「支配のイデオロギー」からの「大衆の自立」のために「科学精神を透徹させる」必要性を強調したことに比べると、韓国民衆の近代化への欲求が朴正熙政権を後押ししている状況を重く受けとめている点に注目したい<sup>83</sup>。

民衆の心情を重視する梶村の態度は、解放直後に行われた信託統治をめぐる論争の評価でも表れた。民族主義あるいは統一志向の歴史学では、多くの民衆が「反託」の立場に立ったことを右翼の世論操作の結果とし、「賛託」という左翼の選択がより現実的であったと評価する傾向がある。しか

<sup>81</sup> 梶村秀樹（筆名：藤森一清）「朴政権の価値体系と韓国の民衆」『情況』78号、1975年2月、10～13頁。

<sup>82</sup> 梶村秀樹「八・一五以後の朝鮮人民」（初出：1976年）、前掲『梶村秀樹著作集 第5巻』、93～94頁。

<sup>83</sup> 梶村秀樹「現在の「日本ナショナリズム」論について」、前掲『梶村秀樹著作集 第1巻』、120頁。

し、梶村は「結果論として考えれば五年間我慢した方がまだしも賢明だったんじゃないか」という「客観主義」を批判し、信託統治に対して「朝鮮人民が大きな疑問を感じたのは当然」だと、民衆の判断を尊重する立場をとった<sup>84</sup>。梶村が批判した「客観主義」は、昭和史論争で荒井が批判した戦後歴史学の「客観主義」と重なる。

このような変化の方向は、1974年の文章に、その前兆が認められる。そこで梶村は、自分の朝鮮史研究の段階を区分した。第1段階は「侵略史の勉強」を進めていた時期であり、第2段階については、内在的發展論の体系化に成功したが、「すばらしい純粹朝鮮」を描くあまり〔中略〕いわば客観主義ないしきれいごとのきらいがあった」と評価した。そして「ロマンチックな「民族像」ではなく「等身大の民衆」を発見したことで、新たな第3段階に入ることができたと説明した<sup>85</sup>。自分の研究に潜んでいた「客観主義」を自己批判していることが印象的である。姜元鳳<sup>カンウォンボン</sup>は、梶村史学が新たな展開を見せるようになったきっかけとして、「金嬉老事件」など在日朝鮮人の矛盾に満ちた生への関心を挙げている<sup>86</sup>。

このような変化を経て1980年に発表された「朝鮮からみた明治維新」では、竹内好に対する新しい態度が確認される。梶村は「日本人が反省などといえるのも、結局成功したゆとりの上に立っているからではないか」という在日韓国人の大学生の質問を紹介し、「朝鮮近代史を学ぶ日本人がよくぶつかるジレンマ」と受けとめる<sup>87</sup>。そこで話題は竹内のアジア主義の

<sup>84</sup> 梶村秀樹「八・一五以後の朝鮮人民」、前掲『梶村秀樹著作集 第5巻』、43頁。

<sup>85</sup> 梶村秀樹「朝鮮史研究の方法をめぐって」（初出：1974年）梶村秀樹著作集刊行委員会編『梶村秀樹著作集 第2巻 朝鮮史の方法』明石書店、1993年、122～123頁。

<sup>86</sup> 姜元鳳「日韓体制下の民衆と「意味としての歴史」——梶村秀樹の韓国認識と歴史認識——」『社会科学』42巻4号、2013年2月（강원봉ほか『가지무라 히데키의 내재적 발전론을 다시 읽는다』아연출판부、2014年所収）、55頁。

<sup>87</sup> 梶村秀樹「朝鮮からみた明治維新」（初出：1980年3月）、前掲『梶村秀樹著作集 第1巻』、137頁。

再評価に移る。梶村は自分の研究について「日本近代を侵略の思想一色にぬりつぶすことに精力を注いだ」と振り返り、竹内好が投げかけた「それでは何をよりどころに日本人の主体性において未来をきりひらいていくのかという、もっとも根本的な問題設定に対しては、「連帯思想」を単に抹消するだけでは、無意味と感じられた」と顧みた<sup>88</sup>。

梶村は「このジレンマを突破するための唯一の武器が「民衆」の論理」だと述べる。明治日本の活力を認め、それは「生命がけの自己変革をとめないながら発揮された、底辺から噴き上げる民衆自身のエネルギーがもたらしたものと分析した。エリート中間層の専制政府が、これを封じこめたすえに民衆を富国強兵と侵略の方向にからめとっていったが、民衆のエネルギーは、「歴史の底層を脈々と地下水のように流れ続け」たとみた<sup>89</sup>。そして、このような歴史像を裏付けるために色川大吉が唱えた「未発の契機」という視点を導入する。かつての色川に対する否定的評価とは明確な違いが認められる。

そして帝国主義に「からめとられながら生きてごくありきたりの民衆の一つの例」として、自分の祖父や父について淡々と語る<sup>90</sup>。梶村は「父などの生き方がもっぱら恥ずかしい否定的なもののようにみえた。朝鮮史の学習を手がかりに近代日本の虚妄をうつことに夢中であった」と振り返った。そうしていたところ、いつのまにか「祖父や父たちの持っていた貧乏性な勤勉さとか、「黙々たる忍耐力」とかのいかにも日本的な「美質」を、意外と自分もひきついでいることに気づいてきた」と告白する。その認識は、「どのような我々の「文化」を創るのかという課題があることに気づいた」ことによってもたらされたと明らかにしている点が重要である<sup>91</sup>。

---

<sup>88</sup> 梶村秀樹、同上論文、141～142頁。

<sup>89</sup> 以上、梶村秀樹、同上論文、143頁。

<sup>90</sup> 梶村秀樹、同上論文、147頁。

<sup>91</sup> 以上、梶村秀樹、同上論文、149～150頁。

1970年の講演で梶村は、祖父や父の具体的な日常生活を分析することを強調したが、それは個々人としてのことだった。それが10年後の文章では「我々の「文化」や「日本的な「美質）」として表現されたのである。

中野敏男が分析したように、1960年代の梶村はナショナルな主体に注目する竹内を猛烈に批判した。しかし、1970年代半ばに新たに「等身大の民衆」を発見した梶村は、中野の分析とは異なり、むしろ竹内の問題意識に接近する姿を見せた。それでは、いかにすれば民衆のナショナリズムは成長至上主義や排外主義と距離をおくことができるのか。梶村は、祖父や父がどのようにして帝国主義に取り込まれたかがわかるといい、そこから解放されるために「近代」の与える最良のものを充分にこなしきることによって、それへの内心のコンプレックスを払拭していくことが、私の課題だろう」と述べた<sup>92</sup>。

民衆のナショナリズムやアジア主義から健全なエネルギーをくみ取ることが果たして可能かをめぐる応酬は、昭和史論争で触発されて以来、今日まで繰り返されている。韓国の白樂晴<sup>ベクナクチョン</sup>は自分の本の日本語版（1985年）に付した序文で「日本の民衆の中に、依然として無視できない現実として残っている民族感情、民族意識を最初からあっさりと国粋主義者に譲り渡して、果してどれだけの実質的なしごとを——外国の民衆はさておいて、日本人自身のために——やりとげられるのか疑わしく思える」と問いかけた<sup>93</sup>。1995年に加藤典洋の「敗戦後論」によって「歴史主体論争」が引き起された。加藤の『敗戦後論』（1997年）は『謝罪と妄言の間』（1998年）と題して韓国語に翻訳された。その序文で加藤は、上記の白樂晴の発言を引用し、自分が探していた「思想的カウンターパート」であると理解と共感を示し

---

<sup>92</sup> 梶村秀樹、同上論文、150頁。

<sup>93</sup> 白樂晴（滝沢秀樹監訳）「はしがき」同『民族文化運動の状況と論理』お茶の水書房、1985年、ix頁。

た<sup>94</sup>。

昭和史論争を整理した大門正克は、日本の近現代を対象とした大きな歴史論争が2度あったとし、「1950年代の昭和史論争」とともに「1990年代に行われた歴史認識をめぐる論争」を挙げた<sup>95</sup>。中野敏男が、1960年代の梶村の竹内批判を、1990年代の「国民的主体」に対する批判を先取りしたものと評価したことも、同じ脈絡で理解することができる。

現代史を貫く論争の過程で、梶村が見せた思想的転回は、どのような意味をもつのか。梶村は、朴正熙政権の近代化路線に完全に包摂されたように見えつつも、しっかりと生活世界を守っていく韓国民衆の姿を真剣に受けとめた。帝国主義あるいは資本の専一的支配を許さない、内在する外部といえる「民衆」の存在を発見したのである<sup>96</sup>。それは、1977年の著書『朝鮮における資本主義の形成と展開』で「今日の南朝鮮における全面的な「従属発展」のもとでの、別に「社会主義」的ではない民衆の民族主義の潮流の展開」に注目したように、みずからの客観主義的な発展段階論を克服する過程でもあった<sup>97</sup>。

梶村は、同じく1977年の『朝鮮史』において「朝鮮民衆」という「理念型」について言及する。しかし、梶村は決して、敗北せず誤謬も犯さない民衆という幻想を持っていたわけではない。それは同じ文章で、「公正なもの、きれいなものが必ず勝つことだけが歴史ではないことを、朝鮮近代史は、典型的に示している」と述べていることからわかる<sup>98</sup>。梶村が信じたのは「未発の契機」であり、それはまさに竹内の言った「未発の思想」

<sup>94</sup> 카토오 노리히로 (서은혜 訳) 「한국어판 서문」 『사죄와 망언 사이에서 -전후 일본의 해부-』 창작과 비평사, 1998年、7頁。

<sup>95</sup> 大門正克 「昭和史論争とは何だったのか」、前掲『昭和史論争を問う』、3～4頁。

<sup>96</sup> 洪宗郁、前掲「梶村秀樹の韓国資本主義論」、200頁を参照。

<sup>97</sup> 梶村秀樹 『朝鮮における資本主義の形成と展開』 龍溪書舎、1977年、240頁。

<sup>98</sup> 梶村秀樹 『朝鮮史——その発展——』 講談社現代新書、1977年、216～217頁。

と一脈相通じる<sup>99</sup>。和田春樹は梶村の死を追悼し、梶村の歴史学を「民衆への確信と祈り」と名づけた<sup>100</sup>。

[付記]

本稿は、홍종욱「일본 지식인의 근대화론 비판과 민중의 발견」(『사학연구』125号、2017年3月)を加筆・修正・翻訳したものである。

---

<sup>99</sup> 竹内好「講座をはじめるに当って」『近代日本思想史講座1 歴史的概観』筑摩書房、1959年、8～9頁。

<sup>100</sup> 和田春樹「民衆への確信と祈り」(初出：1989年7月) 梶村秀樹著作集刊行委員会編『梶村秀樹著作集 別巻 回想と遺文』明石書店、1990年。

## 参考文献

### ○史料

『箱根会議議事録；Association for Asian Studies Conference on Modern Japan Proceedings of Preliminary Seminars at Hakone, Japan; Aug.30-Sept.1, 1960』1961.

### ○著書・論文

〈日本語〉

荒井信一「危機意識と現代史——「昭和史」論争をめぐる——」（初出：1960年）大門正克編著『昭和史論争を問う——歴史を叙述することの可能性——』日本経済評論社、2006年。

大門正克「昭和史論争とは何だったのか」、前掲『昭和史論争を問う』。

梶村秀樹（筆名：藤森一清）「日韓条約体制10年の帰結——日韓体制の軌跡と変革の視座——」『破防法研究』24号、1975年12月。

———（筆名：藤森一清）「朴政権の価値体系と韓国の民衆」『情況』78号、1975年2月。

———『朝鮮における資本主義の形成と展開』龍溪書舎、1977年。

———『朝鮮史——その発展——』講談社現代新書、1977年。

———「竹内好氏の「アジア主義の展望」の一解釈」（初出：1964年）梶村秀樹著作集刊行委員会編『梶村秀樹著作集 第1巻 朝鮮史と日本人』明石書店、1992年。

———「日本人の朝鮮観」の成立根拠について——「アジア主義」再評価論批判——」（初出：1964年）『梶村秀樹著作集 第1巻』。

———「現在の「日本ナショナリズム」論について」（初出：1965年）『梶村秀樹著作集 第1巻』。

———「排外主義克服のための朝鮮史」（初出：1971年）『梶村秀樹著作集 第1巻』。

———「朝鮮からみた明治維新」（初出：1980年）『梶村秀樹著作集 第1巻』。

———「朝鮮史研究の方法をめぐる」（初出：1974年）梶村秀樹著作集刊行委員会編『梶村秀樹著作集 第2巻 朝鮮史の方法』明石書店、1993年。

———（筆名：吉永長生）「ベトナム派兵の傷痕」（初出：1974年）梶村秀樹著作集刊行委員会編『梶村秀樹著作集 第5巻 現代朝鮮への視座』明石書店、1993年。

———「八・一五以後の朝鮮人民」（初出：1976年）『梶村秀樹著作集 第5巻』。

楠原利治・北村秀人・梶村秀樹・宮田節子・姜徳相「「アジア主義」と朝鮮——半沢弘「東亜共栄圏の思想」について——」『歴史学研究』289号、1964年6月。

金原左門『日本近代化』論の歴史像——その批判的検討への視点——』中央大学出版部、1968年。

亀井勝一郎「現代歴史家への疑問——歴史家に「総合的」能力を要求することは果して無理だろうか——」（初出：1956年）、前掲『昭和史論争を問う』。

- 川島武宜「近代日本史の社会科学研究——一九六〇年箱根会議の感想——」『思想』442号、1961年4月。
- 姜元鳳「日韓体制下の民衆と「意味としての歴史」——梶村秀樹の韓国認識と歴史認識——」『社会科学』42巻4号、2013年2月。
- 高島通敏「二つの「戦後」と「近代後」——「池袋会議」の主題——」『世界』486号、1986年3月。
- 竹内好「講座をはじめに当って」『近代日本思想史講座1 歴史的概観』筑摩書房、1959年。
- 「学者の責任について——遠山茂樹氏に答える——」『展望』90号、1966年6月。
- 「近代の超克」（初出：1959年）丸川哲史・鈴木将久編『竹内好セレクションⅠ 日本への／からのまなざし』日本経済評論社、2006年。
- 「日本のアジア主義」（初出：1963年）丸川哲史・鈴木将久編『竹内好セレクションⅡ アジアへの／からのまなざし』日本経済評論社、2006年。
- 遠山茂樹「明治維新研究の社会的責任」『展望』84号、1965年12月。
- 戸邊秀明「昭和史が生まれる」、前掲『昭和史論争を問う』。
- 中塚明・山辺健太郎「開国と植民地化の過程」朝鮮史研究会編『朝鮮史入門』太平出版社、1966年。
- 中野敏男「方法としてのアジアという陥穽——アジア主義をめぐる竹内好と梶村秀樹の交錯——」『季刊 前夜』第1期8号、2006年7月。
- 「植民地主義批判と朝鮮というトポス——アジア主義をめぐる竹内好と梶村秀樹の交錯 その2——」『季刊 前夜』第1期9号、2006年10月。
- 永井和「戦後マルクス主義史学とアジア認識——「アジア的停滞性論」のアポリア——」古屋哲夫編『近代日本のアジア認識』緑蔭書房、1996年。
- 白楽晴、滝沢秀樹監訳『民族文化運動の状況と論理』お茶の水書房、1985年。
- 洪宗郁「梶村秀樹の韓国資本主義論——内在的發展論としての「従属發展論」——」『社会科学』42巻4号、2013年2月。
- 松沢弘陽「書評『昭和史（新版）』（初出：1959年）、前掲『昭和史論争を問う』。
- 宮田節子「日本帝国主義の朝鮮支配」朝鮮史研究会編『朝鮮史入門』。
- 安丸良夫「日本の近代化についての帝国主義的歴史観」（初出：1962年）同『〈方法〉としての思想史』校倉書房、1996年。
- 「反動イデオロギーの現段階——歴史観を中心に——」（初出：1968年）同『〈方法〉としての思想史』。
- 和田春樹「現代的「近代化」論の思想と論理」『歴史学研究』318号、1966年11月。
- 「民衆への確信と祈り」（初出：1989年7月）梶村秀樹著作集刊行委員会編『梶村秀樹著作集 別巻 回想と遺文』明石書店、1990年。

〈朝鮮語〉

강원봉(河本) 『가지무라 히데키의 내재적 발전론을 다시 읽는다』 아연출판부, 2014年。

朴喜範 「「로스토크」史觀의 批判 -近代化問題를 中心으로-」 『經濟論集』 5卷1号、1966年3月。

안중철 「주일대사 에드윈 라이샤워의 '근대화론' 과 한국사 인식」 『역사문제연구』 29号、2013年4月。

임성모 「냉전과 대중사회 담론의 외연 : 미국 근대화론의 한·일 이식」 『한립일본학』 26輯、2015年5月。

장세진 「라이샤워 (Edwin O. Reischauer), 동아시아, '권력/지식' 의 테크놀로지 -전후 미국의 지역연구와 한국학의 배치-」 『상허학보』 36輯、2012年10月。

카토오 노리히로、서은혜 訳 「한국어관 서문」 『사죄와 망언 사이에서 -전후 일본의 해부-』 창작과 비평사、1998年。